

「父」と女神と戦う少女たち

— ダイアナ・ウィン・ジョーンズの『わたしが幽霊だった時』—

き はら たか こ
木 原 貴 子

はじめに

ダイアナ・ウィン・ジョーンズ (Diana Wynne Jones) の『わたしが幽霊だった時』 (*The Time of the Ghost*, 1981) は、主人公の次女セリーナ (通称サリー) と長女シャーロット (通称カート)、三女イモジェン、四女フェネラ (Charlotte/Cart, Selina/Sally, Imogen and Fenella Melford) の四姉妹が、家父長として君臨する「父」(Himself) という現実世界における権威者と、邪悪な古代の女神モニガン (Monigan) というファンタジーの世界における権威者という二人の権威者との人生／命をかけた戦いを描いた作品である。

作家ジョーンズは、フェミニズムの波がもたらした女性の「本当の解放」を実感し、女性の「視点」を用いて描いた作品とこの作品を位置付けている⁽¹⁾。本論では、登場人物たち、とりわけ姉妹たちの「言葉」の力に留意しながら、姉妹に付与された「幽霊」「魔女」という呼称の意味を明らかにし、虐げられていた少女たちが自分たちの力で「解放」を勝ち取るまでの葛藤を考察したい。

I 幽霊となった少女

物語は、サリーが自分に「肉体」(“body”) がなく、「見えない」(“invisible,” 9) 存在になってしまったことを認識するところから始まる。物語の進行に沿って次第に明らかになるが、七年後の世界からタイムスリップしてきたため、死んではないものの実体を持たない「幽霊」(ghost) のような状態になっている。そのため両親や三人の姉妹に姿は見え、言葉も聞こえず、気づいてもらえない。何度も姉妹に話しかけ、時に口論に参加するが、その言葉は届いていない。思わず叫んだ「聞いて、見て！ 私に気づいて！」(“listen, look! Notice me!” 22) という言葉は彼女の状況と苦悩を端的に表している。言葉を失ったサリーの言葉に対する執着は、姉妹が書き損じた手紙の詰まった屑籠へ飛び込んでいく姿にも見て取ることができるかもしれない。

She dived towards it [the wastepaper basket] like a swimmer in her eagerness. And there, sticking sideways out of the top, was a sheet of blue writing paper....

Desperately, she pressed her face down among the other papers....

Furiously, she threw herself at the heaped wastepaper basket. She went right through, and found herself looking at the wallpaper beyond. But she was so determined that she backed away and threw herself forward again, and again, and again. (44-6)

両親に宛てて書かれた手紙で溢れんばかりの屑籠へ「夢中で」「必死に」「猛然と」飛び込む姿は、まさしく言葉の中へのダイブであり、あたかも全身に文字を纏いたいかのようである。また、同じ場面で両親に説明するため便箋を一冊すべて使い切ったという記述があるが(45)、そこには彼女の伝えたいという強い思いとその術を持ちえないジレンマが見て取れる。言いたいことが伝わらず、聞きたいことも聞けない状況を何とか打破したいと願いつつもままならないサリーの様子を描かれている。

しかし、姉妹たちはサリーの不在に何ら疑念を持っていない。なぜなら彼女はこの時、奇しくも死んでいたのである。姉妹は両親の自分たちへの無関心な態度に不満を持ち、「私たちの一人に何か——何か恐ろしいことが起きて二人とも気づきもしない」(64)可能性を検証するため、「サリーを殺して、死体を処分した」(47)という恐ろしい手紙を両親に送る「計画」を実行していたのである⁽²⁾(サリーは実際には友人の家に身を寄せている)。ローゼンバーグ(Rosenberg 2)やメンドルソン(Mendlesohn xxiv)などの批評家、またジョーンズ自身も言及しているように、この作品には作家が体験した育児放棄が深く反映されている。姉妹たちの家には調理をするコンロもなく、コーンフレークも絵を描く紙もブラジャーも買ってもらえない。いつも腹を立てている父親とも、いつも疲れている母親(Phyllis)ともまともに会話することもできない。フェネラが意を決して「私たちが捨て置かれているとは思わないの？」と母親に訴えるが、「ばかなことを」と相手にされない(91)。姉妹の言葉は届かないのである。

つまり、この時サリーは二重の意味で肉体と言葉を持たない状況にあった。すなわち、七年後からやってきた「幽霊」であったために身体がなく人と話をすることができず、そして、無関心な親に自分の言葉を届けようとする計画の中で「不在」だったからである。それゆえ誰もサリーの姿が見えず、声が聞こえない状況に疑問を持たず、それを受け入れていたのである。幽霊となったサリーの「見えないこと」に関して、レトネン(Lehtonen)がサリーの「力の無さ、存在の無さ」(“powerless, non-existence,” 213, 222)を表していると述べているように、サリーはまさしく無力である。そして、実在しながらも透明な存在として、語る言葉を持ち得ないという意味で、幽霊のサリーは、集団における最たる弱者、サバルタンの存在と言えるのではないだろうか⁽³⁾。

II 父と娘、あるいは「父」と魔女

姉妹が自分たちの存在に気づいて欲しいと願った両親とはどのような存在なのだろうか。彼女

たちへの無関心については先にも言及したが、「父」に仕え、仕事に忙殺されている母親は、娘たちに対しては口先ばかりの関心を示すものの、実際には聞きたくないことや見たくないものは黙殺する。すなわち、「不快なものには目を閉じる」(149) という態度で、彼女たちと真剣に向き合うことを避けている⁽⁴⁾。

一方、「父」は娘の名前さえ正確に覚えられず、相対する時は絶えず怒っている。

Everyone well knew that Himself wanted to let rip in one of his screaming rages. He wanted to roar and shout and hit people and call his daughters bitches.... (162)

怒れる「父」は娘を罵倒し、暴言を吐き、殴る。が、娘たちは怯えて何も言えない⁽⁵⁾。家庭における絶対的権威者である。

「父」の場所は隣接する男子寄宿学校である。経営者であり、校長であり、ラテン語の教師をしている⁽⁶⁾。そこは姉妹たちの立ち入りが厳しく禁止されている場所である。すなわち、女性を排除した特権的男性社会であり、その頂点に立つ「父」は男性社会の象徴である。さらに、学校という世界では、少年たちを前に食前の祈りを唱える姿に見られるように、「父」は時に「司祭」(“priest,” 52) のようでもある。また、校内には、姉妹が少年たちと密かに果実を盗み食いする菜園があり、そこは「禁断の場所」(“a forbidden place,” 30) と呼ばれており、まさにエデンの園のイメージを見て取ることができる。そして、大文字で表記される「父」という呼称と絶えず「天使」に譬えられる母親を従えていることも考え合わせれば、「父」の世界はキリスト教世界を象徴していると考えられるのではないだろうか。すなわち、「父」は家庭における絶対的権力者、家父長制の権化であり、男性社会の代表、キリスト教的世界の象徴である。

その「父」に姉妹は作品中、二度にわたって「魔女」と呼ばれている。一度目は姉妹が儀式のための血を集めていると知らされた「父」が血の満ちた鉢を前にしたカート、イモジェン、フェネラを「魔女の集団」(“a coven of witches,” 162) と呼び、二度目は黒い牝鶏の死骸と血のついた鎖を見つけた「父」が、「何という邪悪な魔女だ、シャーロットーイモジェンーフェネラ！」(“You malicious little hag, Charlotte — Imogen — Fenella!” 207) と罵倒する。最初の場面は、サリーの幽霊を救うためギリシャ・ローマの物語に倣って、彼女に血を飲ませて話をさせるための儀式の準備中の出来事である。姉妹たちはその行為が「異教徒」(“pagan,” 158) に相応しい「魔術」(“witchcraft,” 167) であると自覚しており、結果として幽霊のサリーに声を与え、言葉を引き出すことに成功する。しかし、三姉妹が魔法を使った訳ではない。なぜならば彼女たちはただの人間の少女だからである。

二度目は、さらに理不尽な状況で三姉妹は魔女と呼ばれている。「父」は黒い牝鶏の死を姉妹の仕業と思い込んでいるが、本当はサリーの仕業であり、しかも父の姉妹への呼びかけの中にサリーの名が含まれていないのである。これは娘の名前に対する習慣的な無関心を示すと同時に、他の三人に対する「父」の不条理な言い掛かりであることを強調している。この後、四人は「父」

から怒号と平手打ち、すなわち言葉と肉体の暴力を浴びせられ、祖母の家へ送られることになる。この暴力と排除の構図は、さながら無実の女性を裁く魔女裁判のようである。

ファンタジー作品に登場する「魔女」は、その善悪にかかわらず、魔法という特殊能力を持った特権化された存在である。しかし、人間の少女や女性が魔女と呼ばれる時、ヨーロッパにおける魔女裁判や魔女狩りの歴史を引き合いに出すまでもなく、疎外される存在であることを意味する。この物語の姉妹は決して「魔女」ではない。彼女たちは、魔法の杖もなく、箒で空を飛ぶことも、秘薬を作ることもできない。それにもかかわらず、キリスト教世界の表象である「父」によって「魔女」と称される姉妹は、実世界における実質的な育児放棄の対象であるとともに、中世、近世の「魔女」がそうであったように、彼女たちも紛れもなく排除される存在、迫害の対象なのである。

サリーは「幽霊」として言葉と肉体が奪われ、カート、イモジェン、フェネラは「魔女」と呼ばれ迫害される。姉妹は、真の解放を手にする以前の「虐げられる女性」を体現しているのである。

Ⅲ 女神モニガンと少女たち

「父」を頂点とした男性的キリスト教世界に反抗するかのようになり、姉妹は異教の女神モニガンの信仰を始める。主唱者は長女のカートである。彼女は「モニガンの書」なる祈禱書（“The Book of Worship of Monigan,” 42）を書き、小屋にモニガン人形を安置して偶像崇拜を行い、「大女性祭司カート」（“Cart as High Priestess,” 106）として、信者の姉妹と二人の少年、ハワード（Will Howard）とネッド（Ned Jenkins）を導く。「父」の世界とは、神も指導者も男女逆転した世界を作り上げたのである。

しかし、物語の始まる以前に、モニガン信仰はカート自身によって中止されていた⁽⁷⁾。かつての捧げものは腐敗臭を漂わせ、打ち捨てられたモニガン人形はかびが生えて「蛆虫のように」（23）なっている。それでも信仰を続けていたと言うフェネラでさえ一度も気配を感じたことがないほど、モニガンは現実性のない存在であった。つまり、姉妹にとってモニガンは決して敵ではなく、実体のない架空の存在、遊びの対象でしかない。ところが、「父」の優等生ジュリアン・アディマン（Julian Addiman）が架空を現実へと変えることになる。サリーからモニガン信仰の秘密を聞いたジュリアンが、黒い牝鶏の命と共にサリーと彼自身をモニガンに捧げる儀式^{ゲーム}を行い、その結果、モニガンは現実の存在となるのである。「サリーとジュリアン・アディマンがここ何世紀ぶりの生命力をモニガンにもたらしてしまった」（132）のである。これが原因でサリーは七年後に命を奪われることになり、救いを求めて「幽霊」の姿で少女時代に戻ってきたのである。そして、彼女を救うために三人の姉妹と二人の少年は、モニガンと対峙し、彼女が半ば手に入れていた生贄サリーを奪い返すための「戦い」をすることになる。こうして、姉妹たちは、実生活においては「父」という男性社会の権威者と、そして同時に、モニガンという目に見えない

世界の権威者と戦うことになるのである。

幽霊になったサリーは、人には見えず声も届かない無力な存在であるが、彼女には人に見えないものが見え、またその声が聞こえる。

Because she [Sally] was a ghost herself she saw the invisible shadow over mounds. In the shadow flickered thin wreaths of thicker shadow, and from them came whispers and sad snatches of things that had once been important. (190)

時を越え、そこに居るものの影と声を認識できる。すなわち、他の姉妹たちには感じられなかったモニガンの気配を感じ、その声を聞くことができるのである。この霊媒的な能力が幽霊サリーの重要な役割である。サリーの「幽霊」としての視点がなければ、モニガンはフェネラの言うように、ただの「退屈な」(“how boring thou [Monigan] art,” 22) 存在にすぎない。つまり、モニガンという存在がサリーによって言語化されることによって「復活」し、言わば可視化され、実体が付与されるのである。さらに、サリーの言葉によってモニガンの凶悪な本性が暴かれる。ジュリアンの儀式の最中に見せる凄まじい力強さ(106-8)も、捧げものを受け取る際に見せる残忍さ(196-8)も、この視線によって「モニガンは恐ろしいほど現実」(“Monigan was terribly real,” 132)であることが実感できるのである。しかも、彼女が語るのは目の前の姿だけではない。

This had been truly Monigan's Place from time immemorial.... These were things which had been done in honour of Monigan. Dim blood flowed. An axe, and now a knife, glinted as it struck. Phantom mouths opened to scream. All these, and hundreds of others like them, melted and moved and reappeared as they went down the slope.... Sometimes the posts stood in a line. More often they stood in a ring. But, however they stood, the posts were where the victims of Monigan were put to be killed. (193)

このように、モニガンがキリスト教の普及する前史の時代から偉大な権威者であり、彼女のために多くの血が流されてきたという暗黒の歴史がサリーによって語られる。それによって、物語におけるモニガンの存在は一層大きなものとなり、強くなるのである⁽⁸⁾。

この強力な女神と姉妹の戦いにおいても、この能力は重要である。物語のクライマックスにおいて、サリーの命の代替となるものを捧げることになるのだが、その際、やはりサリーの霊媒的能力が重要となる。勿論、その場の臨場感を高める効果については言うまでもないが、モニガンに対する姉妹それぞれの役割を決定させる。まず、カートはモニガン信仰の女性祭司としての役割を果たす。祝詞を主導してモニガンを呼び出し、用件を伝える⁽⁹⁾。

Cart said, “Monigan, mighty goddess, we have a ghost, and the ghost is in your power

and has asked us for help. What do we have to do to redeem this ghost from you?"

Monigan answered. It was like heavy pressure, or heavy heat. It had no sound, and it was remote and scornful. *Please yourselves. I have the right to claim a life seven years from today....*

"Whose life?" Ned asked, not quite in Monigan's direction.

But Monigan was dealing only with Cart, as priestess. (195-6)

カートは幽霊を救いたいことを伝え、モニガンは彼女の問いかけに応じる。その場にいるほとんどの者はモニガンの存在を感じているが、モニガンと交渉できるのはカートだけである⁽¹⁰⁾。

イモジェンは女神を最も喜ばせる贈り物、サリーの命の代わりとしてモニガンを納得させる捧げものをする。

"I'm going to give you honour and glory, Monigan. You'll get cheers from the masses and the applause of huge audiences...."

Imogen paused dramatically, pointing Ned's picture to roughly where Monigan was. She was certainly doing some good hard advertising, Sally thought....

"The supreme sacrifice," said Imogen. "The rise of my beauty into the limelight. I'm giving you my musical career, Monigan. Do you want it?"

Yes, said Monigan and moved in and took it. (218)

イモジェンは音楽人生を捧げ、モニガンはそれを受け取り、結果としてサリーの命は助かる。しかし、実際に彼女が捧げたものは、この時は現実化していない未来、彼女が想像する姿 (219) にすぎず、言い換えれば、口先だけの言葉である。イモジェンは言葉によってサリーの命を救ったのである⁽¹¹⁾。両親には伝わらなかった言葉がモニガンには伝わり、願いは聞き届けられたのである。

もう一人の妹フェネラの役割は、実は姉たちほど直接的ではないが、重要である。すなわち、幽霊が自分たちの身近にいることを姉たちに伝え、その存在を認識させる役割を果たすのである。難しい言葉に自信が持てないため、結局「何事もちゃんと説明したことがない」(56) ほどに、彼女は言葉を使うことが苦手である。そんな妹に対し姉たちは「フェネラはフェネラだから」(28) と諦めている⁽¹²⁾。しかし、言葉は拙いが彼女の鋭い観察眼を通して語られる内容は物事の核心に迫ったものであり、母親に現実を突きつけ、父親に真実を告げる⁽¹³⁾。彼女は最初からサリーの幽霊に気づき、絶えずその存在を口にしている。

Ned Jenkins raised his pale face. "I think the ghost's back."

Fenella looked up to deny it, and paused. "Yes, he's right. It's here again. I can feel."

Imogen suddenly became hysterical.... "What do we *do*? *Do* something, somebody! I'm not going to live with a ghost all my life! I refuse to!" (152-3)

「幽霊が戻ってきた」というフェネラの言葉にイモジェンは怯えてしまう。フェネラの繰り返し、周囲の人たちに幽霊の存在を意識させるようになり、確信させ、幽霊を救うためのそれぞれの行動へと導かれていくのである。

そして、最後に、幽霊のサリーは、傷ついた自分の身体はもはや生贄として用をなさないことをモニガンに伝え、イモジェンの捧げものと自分の言葉が受け入れられ、死を免れたことを知る(219)。こうして、物語は初めてハッピーエンドを迎えることとなるのである。

ここに至るまでには、信者である二人の少年の役割も、実は無視できない。幽霊を助けるために、血の儀式や捧げものの儀式にも参加し、協力している。モニガンに捧げものをするを提案したのはハワードであり、ネッドは幽霊のサリーの存在をまさしく言葉の形で目に見えるようにしている。

IM ONE MELFORD GIRL DON'T KNOW WHICH 7YRS OFF NEED HELP MONIGAN HELP

The message ended in sharp scribble because Ned, still white and staring, seemed to expect her to go on writing. She had to wrench herself away from his limp hand and then give it a sharp shove the other way to show him she had finished. (146-7)

授業中に突然現れた幽霊にネッドが言わば憑依され、ペンを奪われ、幽霊のメッセージがノートに書き留められるという場面である。実は、幽霊となったサリーはそれまでも降霊会でグラスを動かし、サリーという名前と「死んだ」("D-E-A-D," 74) という単語を綴ったことがあるが、実体のサリーの安全が確認されると曖昧にされてしまう。しかし、このネッドのメモは幽霊の存在を実証し、出現の意図を示す決定的な証拠となるのである。また、伝統的フェミニズム批評において「ペン」が男性性を象徴する道具であったことを鑑みれば、サリーの行為をロゴス中心主義への細やかな反逆と読むこともできるのではないだろうか。

このように、「父」の世界、キリスト教的世界において「言葉」を奪われていた姉妹たちは、女神モニガンとのサリーの命を巡る攻防を通して、自らの「言葉」を取り戻し、自らの存在価値を確認することができたのではないだろうか。

IV 父と少女、再び

物語の最後、サリーは命を取り留め、イモジェンは音楽から解放され、そして、母親が病院に駆けつけたことで母娘関係の改善が暗示され、大団円で終わるかのようには思えた。しかし、最後

にジュリアン・アディマンの死が告げられる。彼がモニガンの聖地マンガン丘陵で命を落としたと聞いたサリーは、結局モニガンが命を一つ手に入れたこと、そして、モニガンは初めからジュリアンの命が欲しかったのではないかと考える (222)。実際に、サリーはなぜ幽霊として七年前に戻ったのかについて疑問に感じていた (115)。それがなければ、彼女が死んでしまうことは明白だったからである。では、ジュリアンの死にはどのような意味があるのだろうか。

ジュリアンの外見や雰囲気については以下のように説明されている。

He [Julian Addiman] was dark and striking-looking, with brows as black as Fenella's and eyes nearly as blue and luminous as Imogen's.... But what people noticed most about him was that, wherever he was, he took control. He was not bossy.... It was just that when Julian Addiman was there things ran Julian Addiman's way (63)

彼の場を支配する雰囲気は彼のリーダーとしての資質を示唆している。ハンサムな外見には妹たちとの類似点が指摘されている一方、二人の姉たちは、彼のもつ「狂気」(“insane,” 126)、邪悪なところや危険性に惹かれ、彼に「心酔」(“your [Julian's] worshipping girlfriends,” 187) していた。しかし、姉妹たちの間で、彼を巡って、各々嫉妬の気持ちはなかったと認めている。

“That's the odd thing!” said Cart. “We were in a way, but actually we were so — such a unity, that when one of us got him in almost didn't matter which of us it was.”

“You make us sound like vultures — or female spiders,” her sister protested.

“Well, we were in a way,” Cart said. “I thought as I was talking that if none of us really cared two hoots about him, even you — well, it makes me wonder if Monigan wasn't really a manifestation of our common thirst for excitement, or our suicidal urges, or something.” (126)

姉妹とジュリアンの関係は、確かに憧れや恋愛の対象ではあるが、突き詰めれば雄を捕食する雌グモのように、ジュリアンに対するサディスティックな心性があるのではないかとカートは分析している。その例としてモニガンを引き合いに出しているが、これは極めて意義深い引用である。ある意味で、姉妹は、モニガンにジュリアンを生贄として捧げたのである。それは、モニガンの意思かもしれないし、姉妹たちの意思かもしれない。そして、後者には「父」への反抗が意図されていると考えられる。ジュリアンは父権社会の絶対的権威者「父」の言わば、「申し子」的存在だったからである。家庭においては、実際の父親の手厚い庇護の元、学生時代から高級自転車を、また、その後も家や車を与えられている。大学卒業後の仕事さえも父親が彼に与えるはずであった。学校では、品行方正で、(ネッドやウィルを引き合いに出すまでもなく)「父」から「非の打ちどころがない」(“above reproach,” 207) と認められている。また、「父」とジュリアンに

は共通点も多いが、二人の最大の共通点は、怒りの狂気と暴力による管理である。サリーは、最初は二人の男性に気に入られたいと願ったが、「父」に気に入ってもらうのは不可能と諦め、ジュリアンに専心することにする。言わば、「父」への感情の代償行為である。それは、最後のジュリアンの生贄についても同じことが言えるのかもしれない。サリーだけでなく、姉妹たちは皆、二人の相似的關係を理解し、言わばジュリアンを「父」の代理としてモニガンに差し出したのである。姉妹たちの居場所は、やはり女性原理を体現するモニガンという異教的世界にあるのではないだろうか。

おわりに

姉妹たちは、実生活においては「父」という男性社会の権威者と、また、目に見えないファンタジー的世界においてはモニガンという権威者と戦い、ある程度の勝利を収める。モニガンに対しては、姉妹たちは奪われかけていたサリーの命を奪い返すことに成功する。「父」が表象する家父長的世界については、父の代理的存在であるジュリアンは亡くなり、母とは和解をし、父も病気になる、その権威性が弱まる可能性が示唆されている。このように、姉妹たち、父の世界、モニガンの世界という三つ巴の戦いを集約すれば、キリスト教的父権世界と異教的母権世界の対立として定立することができるのではないだろうか。つまり、結果としてみるならば、「魔女」の顔を持つとも言える姉妹たちは、モニガンの世界に与していると言える。結局、男性原理と女性原理の葛藤がこの物語の主軸を成しているのである。とすれば、最終的な姉妹たちの幸福の獲得は、家父長的世界の打倒をある程度成し遂げたということになり、1970年代におけるフェミニズムの興隆が反映されていることが想定される。しかし、やはり現状を正確に映しているとは言えないであろう。フェミニズムの戦いが決して容易なものではないことは、21世紀の様相を鑑みれば、言うまでもないことであろう。その意味では、ユートピ的な楽観的な結末なのかもしれない。最初に述べたように、父の世界が現実的で、モニガンの世界がファンタジー的色彩を帯びていることはそのことを表しているようにも思われる。しかしながら、結末としてのファンタジー的世界の勝利はまた、ファンタジーの力への信頼が託されているとも言えるのではないだろうか。

〈註〉

- (1) ジョーンズはエッセイ(“Heroes.” 1992)の中で、同じ意向で女性を中心に置いて描いた作品として *The Spellcoats* (1979)、*Black Maria* (1991)、*Fire and Hemlock* (1985) を挙げている。
- (2) 引用はフェネラの手紙であるが、「処分」(“desposed”)と「死体」(“boddy”)は綴りが間違っている。詳細は後述するが、彼女の言葉使いの不自由さを示している一例である。
- (3) G・C・スピヴァックは、従属的地位にある女性を「サバルタンの女性」と呼び、「歴史的に沈黙させられてきた主体」(74)と定義し、興味深いことに、「透明な〔目に見えない〕存在」(15)と述べている。正にサリーの状況を表していると言えるのではないか。

- (4) 口先だけの言葉にも関わらず、母の言葉は姉妹たち、特にイモジェンに対して呪縛となっている。その点に関して、メンドルソンは、少女たちが母フィリスの語りの支配から自分たちを解放することについての物語であると述べている (2009, 35)。
- (5) とは言え、姉妹たちが怯え凍んでいる中でフェネラは怒っている「父」に「取えて」話すことができる存在であり (163)、イモジェンもネッドを救うために一度「父」に立ち向かっている (164)。
- (6) ラテン語、ギリシャ・ローマの古典など、女性の学ばないことを学んでいる。サリーが幽霊になって初めて侵入した場所が「父」がラテン語を教える教室だったことは、彼女の疎外感を一層高める効果があるのではないか。
- (7) 信仰を中断したのは、姉妹みんなが不快な思いをし、カートが「古代の女性の邪悪な何か」(“a dark old female Something,” 106) という正体に気づいたためである。
- (8) モニガンの女神たる所以は時間を操る力であるとサリーは指摘している (151)。
- (9) モニガンへの祝詞を唱える際に、カートがその場にいる者を導く様が教会で聖歌を歌う状況に響えられているが、対キリスト教の女神信仰の行為に関する喩えとして意識的であろう (194)。
- (10) 霊のサリーは、モニガンという命名や歴史への知識を考慮し、カートにはモニガンに関する「本能」(193) があると述べている。
- (11) イモジェンの話し方は「本みたい」(“talk like a book,” 24, 25) と姉妹たちに批判されるが、大仰な話し方がモニガンとの交渉には効果的であったのではないだろうか。
- (12) フェネラの単語の使い方は、実際に間違っているのではなく、強い姉妹たちの言動にむしろ動揺しているにすぎないようである (56)。姉妹たちには話せないという設定は、小さな支配と抑圧の構図かもしれない。
- (13) フェネラは、厨房で働く女性の不正について母親に (148-9)、またモニガン信仰の仲間の一人としてジュリアンの名前を「父」に告げる (206)。

参考文献

- Butler, Charles. *Four British Fantasists: Place and Culture in the Children's Fantasies of Penelope Lively, Alan Garner, Dianna Wynne Jones, and Susan Cooper*. Lanham: Scarecrow Press, 2006.
- Cadden, Mike. Ed. *Telling Children's Stories: Narrative Theory and Children's Literature*. Lincoln: University of Nebraska Press, 2010.
- Jackson, Anna. “Uncanny Hauntings, Canny Children.” Jackson, Anna, Karen Coats and Roderick McGillis. Ed. *The Gothic in Children's Literature: Haunting the Borders*. New York: Routledge, 2008. 157-76.
- Jones, Diana Wynne. “Heroes.” *The Official Diana Wynne Jones Website*. <<http://www.leemac.freereserve.co.uk/articles.htm>>. Accessed Aug. 2, 2014.
- _____. *The Time of the Ghost*. 1981. London: Harper Collins, 2001.
- Lehtonen, Sanna. “Invisible Girls: Discourses of Femininity and Power in Children's Fantasy.” *International Research in Children's Literature* 1 (2008) 213-26.
- _____. “Shifting Back to and Away from Girlhood: Magic Changes in age in Children's Fantasy Novels by Diana Wynne Jones.” *Papers* 21: 2 (2011) 19-32.
- Mendesohn, Farah. *Diana Wynne Jones: Children's Literature and the Fantastic Tradition*. New York: Routledge, 2005.
- _____. “Now Let Us Put Away Childish Things: Games, Fantasy and the Elided Fantasy of Childhood.” *Extrapolation* 50: 1 (2009) 33-44.
- Rosenberg, Taya. “Introduction.” *Diana Wynne Jones: An Exciting and Exacting Wisdom*. Ed. Taya Rosenberg et al. New York: Peter Lang, 2002. 1-12.
- Sands-O'Connor, Karen. “Nowhere To Go, No One To Be: Diana Wynne Jones and the Concepts of Eng-

lishness and Self-Image." *Diana Wynne Jones: An Exciting and Exacting Wisdom*. Ed. Taya Rosenberg et al. New York: Peter Lang, 2002, 13-24.

G・C・スピヴァク「サバルタンは語るることができるか」植村忠男訳、みすず書房、1998.

(付記) 木原貴子先生は2014年10月20日に急逝されました。享年49歳でした。本学に在籍されたのは短期間でしたが、授業と学務に尽くされ、学生に深い感銘を与えました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。